



せりがやだより

横浜市立芹が谷小学校

令和5年 6月学校便り

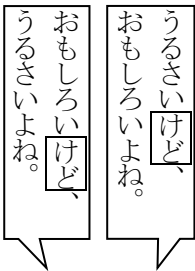


逆転の思考の眼差し

副校長 富永 亮大

ようやく新型コロナウイルスの扱いが感染症法上、2類から5類へと引き下げられました。予防対策を継続しながらも、できるところから以前の生活様式を取り戻していくことになります。

先日、廊下で会った子どもに、「ドクター。」と呼ばれて、「どうして、博士なの。」と聞いたら、「だって、去年は白衣を着て、朝会の話をしていたから。」と答えられました。今年度は、ニュースキャスターに扮して、週初めの朝会の話をしていますが、少しは楽しんでもらえているのかなと心がこそばゆくなりました。

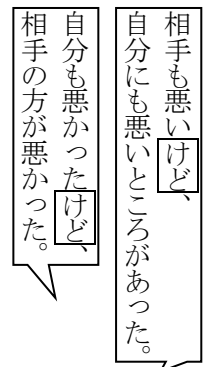


そのようなわたしですから、自身が子どもの頃から周りの人からこのような言葉を受けることがよくありました。わたしの姿は同一でありながらも、その姿を評する言葉は異なっていました。この二つの表現を見て、みなさんは、どのように感じるでしょうか。同じ相手に向けられた言葉でありながら、一方は否定的に思っていて、もう一方は肯定的に思っていることが透けて見えます。わたしは、左の言葉を発した人には緊張をし、右の言葉を発した人には安心を覚えました。

大学受験のときに、国語の現代文で筆者の意図を読む問題を解くには、「けど」の逆接語が出てきたら、筆者の主張は、後半の方にあると学んだことがあります。なるほど、そのように読み取ると、人の言葉に「けど」があると、前半の言葉は、後半の言葉の引き合いに出されているに過ぎないと感じます。

そのことが分かってからは、言葉にしないことでも、いつも自身がどちらの思考をはたらかせているかが気になるようになりました。それは、相手のそれについても同様に当てはまりました。いわゆる「ポジティブ・シンキング」か、その反対かです。

子ども同士が揉めたときにも、双方の言葉が次のどちらにあるかでそれぞれの思いがどちらに強いのかを見（聞き）分けてきました。もうみなさんもお分かりのことと思いますが、左の思いをもっているうちは、事態がなかなか収まりません。相手が非を認めるか、別の誰かに正誤の判決を下してもらおうかするまで気が済まなくなります。つまり、自身では、解決することができません。これに対して、右の思いをもつことができると、自浄作用がはたらきます。自身を内省して、自己解決を図ることができるようになります。そこには、人としての成熟した姿を感じます。



わたしたちは、これまで長きにわたり、様々な制限に見舞われて、耐え忍ぶ年月を過ごしてきました。それだけに、自由な生活のありがたさや人と人のつながりの大切さを改めて実感しました。おかげで、人は、多くの解決の策や術を編み出しました。これからは、これまで以上に心豊かな毎日を築きたいと思います。

今までたいへんだったけど、
当たり前を大切に思うことができるようになった。

とも **共にチャレンジ** かがや **みんな輝け!**